

# 私の一冊

歯科衛生学科 山本智美 先生

青山美智子 著 『お探し物は図書室まで』

小鹿図書館 913.6/A 58

そっと背中を押してもらえるような、ほんのり温かい気持ちになれた一冊をご紹介します。

この本は短編小説5章で構成されており、主人公はそれぞれが仕事や人生に少し行き詰まりを感じている20代から60代の人々です。生活に大きな不満はなく毎日が流れるように過ぎていく、かといって充実しているともいえない何か物足りなさを感じている人々が、あるきっかけで図書室を訪れるところから物語は始まります。

各章の舞台となるのは地域のコミュニティハウス(公共施設)にある小さな図書室です。物語のキーパーソンは、大柄で独特の服装、髪型、少し不愛想で近寄りがたいけれど聞き上手な図書室司書の小町さゆりさん。小町さんの「お探し物は?」の一言から主人公との会話が始まります。小町さんは、主人公とは一見何の関係もないと思えるような本を紹介してくれます。主人公も最初はその本には関心がないものの、やがて、その本に主人公自身が今の仕事や生活を俯瞰していく。本を通して次第に本当に探していたもの(こと)に気づき、求めていたもの、やってみたいことをみつけていく、そんなストーリーが繰られています。ここまで流れると、ドラマのような別世界の話と思うかもしれません、主人公はじめ登場人物は特別な人ではなく、友達、先輩、家族等の身近な人、そして自分自身に重ね合わせてみることもできるでしょう。

また、ストーリーには小町さんが“本の付録”と称する「羊毛フェルト」を主人公にプレゼントするシーンがあります。毛糸から作る羊毛フェルトはストーリーの脇役となり、温かみのあるいい味を醸し出していることに気づかされます。小町さんは羊毛フェルトについて、“作っているうちにやっぱりこうしたいなと思ったら軌道修正がしやすくて、途中でやり直せるもの”と語っていて、羊毛フェルトはストーリーの片鱗を語っている存在となっています。

章の構成も年齢に応じた内容で、現在、今の自分に置き換えてみたり、将来の自分を予想してみたり…、とても読みやすい物語です。探していたものは本ではなく、自分の素直な気持ちかもしれません。読んだ後、ほっこりする、気になっていたことにチャレンジしてみようかな、そんな気持ちにさせてくれる一冊です。仕事や勉強を離れ、くつろぎながら手に取っていただけたら幸いです。